

インターナショナルコース1期生 座談会



日時：2025年7月27日 場所：本校第1応接室

【参加者】

名取 美衣

総合型選抜で中央大学国際経営学部進学。

現在は必修科目として、経営、経済、英語を中心に学んでいる。

菅谷 央良

オランダのエラスムス大学（Erasmus University）進学。専攻は International Business Administration。

本校在学中、高1から高2にかけて、アメリカ（カリフォルニア）に1年間留学。

小島 麻那

アメリカのフォーダム大学（Fordham University）進学。専攻は Global Studies。

本校在学中、高1の終わりにコリブリ（日仏交換留学ネットワーク）でフランスに交換留学。

●コース選択●

——インターナショナルコースを選択した理由を聞かせてください。

名取 母からインターナショナルコースがあることを聞き、英語で数学や理科を学べることが面白うだと感じました。そして最後は直感で選びました。1期生ということで、特に明確な目的があったわけではありませんでした。英語で学べるということで楽しそうだなというイメージでした。今は、インターナショナルコースに入ってよかったですと考えています。

菅谷 私もフィーリングの部分が大きかったです。英語を話せたらかっこいいなと思い、自分もかっこよくなりたいから選びました。インターナショナルコースが設けられると聞いて、一瞬で迷いなく決めました。また、インターナショナルスクールの友達が自由に意見を出すことができる姿に憧れていて、自分もそうなりたいと考えました。

小島 母が英語の先生をしており、小さい頃から英語が得意でした。自分の得意なことを生かしたいと考えて、インターナショナルコースを選びました。もともと海外の映画を小さい頃からよく観ていて、強い関心がありました。

——「周りの人たちがインターナショナルコースに行くから、自分も行く」ということはありましたか？

小島 「みんなが行くから」というよりかは、ひとりひとりが自分の意志で（インターナショナルコースを選ぶことを）決めていたと思います。

菅谷 もともと海外に関心のある人たちが集まってきた、という感じでした。

小島 わざわざ聞かなくても、「（インターナシ

ヨナルコースに）行くよね？」みたいな。

——小学校の頃から、英語を話すことや聞くことがとても好きだった、ということですかね。

●クラスの雰囲気●

——中学校はインターナショナルコースだけのクラスでした。クラスの雰囲気はどうでしたか。

菅谷 私たちの学年は、インターナショナルコースが17人と少人数で、クラスも3年間同じだったので、とても団結力がありました。同じ学年でも、アカデミックコースのクラス（A、B組）とは独立していた気がします。

名取 行事のときにも、クラス替えがない分、「運動会は去年よりもいい結果を残そう」という話ができました。ダンスコンクールとかもそうでしたね。より一体感が生まれました。

菅谷 クラスのなかでいくつかグループはありましたが、クラス全体で17人だけだったので、みんなが仲いい様子でした。

名取 一体感がありすぎてA・B組の人からは近寄りがたいと思われていたっぽいですね。それだけ自信にあふれていた、ということだと思います。

菅谷 そもそもインターナショナルコースを選ぶという時点で、すでに自分の意志が固まっていて、それを主張できる人が多かったと思います。そういう人が集まっていたから、というものもあるかも。

——意志があまり強くない子にとっては大変な場所という感じでしたか。

名取 そういう子もいたとは思うけど、そこまで大変ということではなかったんじゃないかな。もちろん本人たちはいろいろ考えていたかもしれないけれど。

小島 誰かがずっと話してばかりということではなくて、たとえば英語とかで授業でわからないところがあれば、お互いに助け合っていました。

名取 英語で学ぶのが難しい数学では、できる子が周りの人に教えてあげることもありました。

菅谷 先生が教えるというより、クラスの全員で相談して、協力して何かをすることが多かったです。

——協力体制というか、お互い助け合う形ですかね。

名取 (授業の中で) ディスカッションやプレゼンテーションがとても多かったです。ペアワークなどで、クラスのみんなと仲良くなることができました。

——中学校からインターナショナルコースに入学した人もすぐに打ち解けましたか。

小島 (中学からの入学生も) オープンな子が多くだったので、シャイな子とか恥ずかしがり屋はいなかつたと思う。

名取 いなかつたよね。

菅谷 孤立するというよりは、(ドミニコの小学校から進学した子も) 興味津々なので、他の小学校から来た人たちに食いつくという感じでした。避けるということはなかつたですね。

名取 (興味津々である点は) みんな一緒でしたね。

——高校に進学すると、アカデミックコースの人たちと一緒にクラスになりましたが、変化はありましたか。

小島 中学校のクラスにいたときよりも、静かになつた気がします(笑)。

名取 最初は緊張したよね。

菅谷 ただ学校自体がコンパクトで、小学校の頃から一緒に人もいたので、アカデミックコースの人でも知っている間柄ではありました。仲良くないということはないですね。「小学校ぶりだね」みたいな。

名取 私たちは小学校から一緒にだったので、そこまで緊張はしなかつたのかも。中学から入った子たちは、より緊張していたかもしれません。インターナショナルコースの取り出し授業で、同じコースの人たちと一緒にになった時の安心感はすごかつた。

小島 素を出すよね。

名取 やっぱり違うんですよね、空気感が違うのかな。「ホーム」という感じ。

小島 言いたいことを授業中は言い合いあっていました。他の教科になると、インターナショナルコースの子も静かになりましたが。

名取 授業の内容やスタンスも、コースによって違っていました。インターの授業はプレゼンばかりでしたね。

菅谷 インターの授業は話し合ったり発言したりすることが多かったけど、コース共通の授業は、先生の話を聞いて、板書をノートにとるというものでした。

名取 授業スタイルの違いは、コースの雰囲気にも影響していたのかも。

——英語でプレゼンをすることは楽しかったですか。

名取 発言をするときも、つねに自信にあふれていたと思います。

小島 英語で発表をするためには準備が必要でしたが、準備した分だけ人に見せたくなりました。アイコンタクトやジェスチャーなど、プレゼンテーションにおいて求められることも

多かったので、それを意識しながら練習を重ねて授業に臨みました。

——ドミニコのインターナショナルコースで勉強してきたことが役立っていると実感するときはありますか。

名取 めっちゃありますよ(笑)。(大学に)入つてみて、ドミニコのプレゼンテーションはクリエイティが高かった気がします。プレゼンの仕方とか、スライドの作りとか、ドミニコのみんなが上手かった。レベルが高かったなって、大学に入って思いました。普通の日本の学校ではここまでプレゼンテーションを経験することはないと思うので、それと比べると(ドミニコの)インターナショナルコースは凄かったのだなと、外に出て改めて感じました。あと、英語がすごく上手い。大学では英語が好きだけどうまく使えないという人も意外といいるので。普通だと思っていたことが、実はレベル高かったんだなって思いました。

——海外大学に進むことを決めるうえで役立ったことは。

小島 専攻としてGlobal Studiesを選んだことは、コースの影響ではなく自分の意思で決めました。小学校の頃から「将来は海外に行きたい」と考えてインターナショナルコースに進学することを決めましたが、中高をインターナショナルコースで過ごしたことで、さらにその気持ちが高まりました。

菅谷 受験については、高校3年生のときに受けたAES(Advanced English Studies II)はとても役に立ちました。受講者も少なかったので先生がひとりひとりの受験に使う教材を準備してくれました。私の場合は、志望する大学にエントリーするにはSATというテストを受

けることが必須でしたが、わざわざ準備してくれました。他の子はIELTSに向けての準備もしていました。1学期には大学を探すことも手伝ってもらいました。

●苦労したこと●

——勉強や行事で大変だったことは何でしたか。
それをどう乗り越えましたか。

名取 高校1年生のときに数学Aを選択しましたが、そのときははじめて日本語で数学の授業を受けました。インターナショナルコースの場合、中学校のときや高校1年生の数学Iは英語での授業だったので、内容がほとんどわからず苦戦しました。今までやってきた内容と全然違うし、用語もわからなくて大変でした。言語の違うものを学ぶとなると授業についていくのも大変。インターナショナルコースの生徒の場合は、数学を日本語で学ぶことに対応するのは難しいと思います。そのときは「やるしかない」と思って頑張りました。

小島 インターナショナルコースから理系に進学するのは難しいということは、先生から注意喚起されていました。

——学校の授業をフォローアップするために塾に通ったりはしていましたか。

菅谷 人によっては中学1年から塾に通っていました。大学受験のための勉強という目的では、私は高校3年生になるまで塾には通っていませんでした。ただ中学3年生までは英語の塾には通っていました。そこでは他の学校の生徒たちと英語で話したり、英語を聞いたりしました。文法も勉強しました。

小島 私は親が英語の先生だったので、アカデミックコースで学ぶ文法などを教えてもらいました。

ました。

——ほかに大変なことはありましたか。

菅谷 高校1年生の途中から2年生の夏にかけて留学していたので、帰国してから勉強のブランクに対応することが大変でした。古文などは既習事項を応用して演習するものだったので、1年間何もしなかった分が響き、授業に追いつくのが大変でした。

——留学はどのくらいの期間、どちらに行きましたか。

菅谷 1年間、カリフォルニアに留学しました。最初は非英語圏出身者と一緒に勉強するクラスにいましたが、文法については基礎から取り組んでいたので対応できました。帰国後は勉強面で大変なこともありましたが、もともといた学年に戻ることができたのはよかったです。

——小島さんはどんなことに大変を感じましたか。

小島 つらかったのは英語とフランス語の両立ですね。インターナショナルコースは、高校では基本的に英語選択になりますが、大学で国際関係を学ぶためにフランス語を学びたかつたので、教科の先生に相談して授業をとることができました。

——フランス語を一緒に学んでよかったですとは何ですか。

小島 大変だったけど、やっぱり楽しいんですよ。「3言語も喋れるぞ！」と思うと、自信もつくし。それに英語と似ているところがあつて、フランス語で知らない単語が出てきても、英語に似ているところがあれば何となく言つていることはわかるんですよ。そういうとこ

ろも楽しい。フランス語と英語で異なる文法もあるが、それを学ぶことも嫌いではなかった。やっていて楽しかったです。コリブリの時も、(フランス人の子と)ずっと一緒にいると(言っていることが)何となくわかってくるのがすごく楽しかった。

——フランス語を書くことはどうでしたか。

小島 文法は暗記しました。暗記は得意でしたね。一方、英語と違って聞く機会がないので、リスニングやディクテーションは苦手でした。

●進路の決め方●

——進路はいつごろ、どのようにして決めましたか。

名取 高校2年生の終わりごろです。高校2年生の夏にオープンキャンパスに行っており、何となく目処は立っていました。経営も学びたいし、今までやってきた英語も使いたいと考えていたとき、国際経営という学部があることを知りました。そしてそれを学べる大学をピックアップしました。最後は直感で選びました。大学名で選んだというよりは、自分の学びたいことから学部を選んで決めました。

——受験準備はどうやって進めましたか。

名取 受験方式は総合型選抜を利用しました。志望理由書や小論文の添削、面接指導は、塾だけではなく、校内のいろんな先生に協力してもらいました。

——高校在学中に留学を経験した菅谷さんはどうでしたか。

菅谷 高校1年から2年にかけて留学していたこともあって、オープンキャンパスには行けませんでした。もともと海外でファッションなどを学びたいという考えはありました

どの国に行くかといったことは決めていませんでした。当初はイタリアやフランスなどがよいのではないかと考えました。しかし旅行で実際に現地に行ってみたら、英語が通じないことがわかり、アメリカの大学に目標を変更しました。高校3年生の4月から9月にかけてはアメリカの大学への進学に向けて、TOEFLを受けたり、それに必要な試験勉強もしました。そうしたなか、バスケットボール部の先輩でオランダに短期留学をしている人がいて、オランダであれば英語を使うことができるのをその人から知りました。他の人は違うことをしてみたいと考えて、オランダの大学へ進学することに変更しました。自分で調べつつ、人にも聞いて4つほど大学の候補を決めていったという感じです。

——小島さんは。

小島 もともと海外の大学で犯罪学(criminology)や犯罪心理学を学びたいと考えていましたが、高校生になって担任の先生と面談を重ねるなかで変更し、好きであった言語や国際関係を学ぶことに変えました。犯罪心理学を学んだ場合には専門用語も多かったり、将来就ける仕事も狭まってしまうということを考慮しました。ドミニコでの授業も、関連する科目として、世界史や政治・経済、フランス語などを選択し、大学にアピールできるようにしました。そのほかにも実績づくりとしてPod Castなどにも精力的に取り組みました。カリフォルニアやニューヨークなどさまざまな地域の大学を探しましたが、国際連合本部もあり、いろいろな国の人々が集まっているので、国際関係を学ぶのならばニューヨークがよいと考えて、フォーダム大学に決めました。

——小学生の頃に考えていた夢と比べると、今考えている将来の夢は変化していますか。

小島 全然違っていると思う。

名取 変わっていますね。

小島 (今描いている将来の姿は) ニューヨークでバリバリ働くイメージ。

菅谷 夢はありすぎて選べない。全部やりたい。

●学園の魅力●

——これから入学を考えている人に向けて、学園の魅力を教えてください。

小島 小規模なところ。

菅谷 コンパクトだから温かくて、ひとりひとりに合った対応をしてくれるところ。面接練習のときには、先生たちがひとりひとりの性格とか好きなこととかを知ってくれているから、アドバイスをたくさんしてくれる。

小島 小規模な学校でなければ、受験を含めてここまで色々なことに対応してもらえることはなかったと思います。(海外大学にエントリーする際に必要となる)推薦状を書いてもらうときも、大きな学校だと生徒の様子などわかつてくれないとと思う。インターナショナルコースは少人数で、先生たちと話す機会も多かったからこそ(推薦状も)書いてもらえた。受験に向けての準備はすごいやりやすかった。

名取 先生たちと仲がいいんですよ。ほんわかした雰囲気で、本当にhomeという感じ。受験勉強ではピリピリすることもありますけど、頼れる人がいっぱいいたことは安心につながりました。しかも頼みやすいんですよ。先生を含めていろんな人に面接とかをお願いしたときも、快く引き受けくださいました。

——安心して学園生活が送れるという点が、と
ても重要であるようですね。本日は貴重なお
話をありがとうございました。